

読み書きの発達と困難を包括的に理解する枠組みに向けて

企画者・司会者	井上 知洋	(聖学院大学)
話題提供者	井上 知洋	(聖学院大学)
	室谷 直子	(常磐短期大学)
	今中 博章	(福山市立大学)
指定討論者	前川 久男	(いわき短期大学)

KEY WORDS: 読み発達, 読み困難, マルチシステムモデル

【企画趣旨】

このシンポジウムは、発達のダイナミックシステムズアプローチ (Gottlieb, 2007; Johnston, 2010) や、その読み書き発達への適用である読みのマルチシステムモデル (Parrila, 2008) の枠組みから、子どもの読み書きの発達と困難さを改めて捉え直す試みとして企画されたものである。読み書き困難に関する研究の蓄積により、その認知的背景への理解が進み、利用できる読み能力検査の数が増え、支援の手がかりとなる情報も得やすくなった現在において、子どもが文字の読み書きを学ぶということ、ならびにその困難について、時間軸に沿ったダイナミックな展開 (発達) の視点を含めながら、より総合的・包括的に理解することを目指す議論の機会としたい。

【話題提供者の趣旨】

1. 就学後 2 年間の読み書きの発達過程に関する縦断研究 (井上)

本報告では、就学当初の子どもの読み書きの発達過程に関する縦断研究からの一連の成果 (Inoue et al., 2017, 2018, 2019) を紹介する。この研究では、読み書き発達に関連する認知的要因 (音韻意識, 呼称速度, 言語性短期記憶, 正書法知識, 形態素意識, 非言語性認知能力, 語彙) ならびに非認知的要因 (動機づけ, 家庭の読み書き環境) の両面に焦点を当て、国内の複数の地域の小学校において、就学当初からの 2 年間にわたって子どもたちの発達を追跡する縦断調査を行った。その結果から、これまで主として以下の 4 点が明らかとなった。(1) 子どもたちはひらがなと漢字のそれぞれの習得に対し、互いに関連し合う複数の認知機能の組み合わせを活用して臨んでいる;(2) ひらがなと漢字の読みの習得は、互いにポジティブに影響し合う関係にある;(3) 子どもの学習課題への取り組みの具合や粘り強さ (課題従事行動) が、特に文章レベルでの読みの流暢さや読解力に寄与する;(4) 子どもの読み書き発達の具合に応じて、保護者は家庭での読み書きに関連する活動の頻度を調整する。また、家庭での読み合い活動は、主以後の文章理解に寄与する。

これらの一連の結果をもとに、子どもの読み書き困難をよりよく理解し、支援方法を考える上での一つの拠り所となるような枠組みのあり方について議論する。

2. 読み書きの発達における形態素意識の役割 (室谷)

形態論は読みのシステムを構成する認知的要因の一つとされ、従来より注目される音韻論等と並び近年研究が進められている。形態素意識とはことばの意味を成す最小単位である形態素への気づきやそれを操作する能力とされる (Carlisle, 1995)。形態素意識は読み書きの発達との関連性が指摘され、英語圏では単語読みや読解において独立した役割を果たすことが報告されているが、日本語において

はほとんど検討がなされていない。本報告では、読み書きの発達と形態素意識との関連性に焦点を当て、これまで主に日本語以外の言語圏で積み重ねられてきた知見を整理した上で、報告者らが日本の小学生を対象に実施した研究の結果を紹介する。小学校低学年の児童を対象とした検討では、形態素意識の能力がひらがなおよび漢字の言葉の読みにおいて、音韻意識等の要因とは独立に一定の役割を果たすことが示され (Muroya et al., 2017)、さらに小学校 4、6 年生を対象とした検討では、形態素意識と読み書き技能、なかでも漢字の読み書き能力との関連性が強いとの結果が示された。

以上を踏まえ、読み書き技能の発達における形態素意識の役割と、これらの知見を読み書き支援においてどのように生かし得るのかについて議論したい。

3. 読み困難児のひらがな拗音表記読み書き指導事例 (今中)

発達のダイナミックシステムズアプローチや読みのマルチシステムモデルは、指導と関連する対象児の発達の变化を「指導手だて→対象児の変化」という線形的因果関係で捉えようとはしない。対象児の課題遂行に関連する環境的要因、行動的要因、心理学的要因などの諸要因の双方向的な相互作用によって自己組織的に対象児の発達の变化はもたらされると考える。この捉え方に依拠して、本報告では、読み困難児 (小学 2 年) のひらがな拗音表記の読み書き指導の経過に伴う読み書きの発達の变化を考えてみたい。

指導事例の概要は次のとおりである。本児は指導開始前に濁音、半濁音を含むひらがな文字すべてを読めたが、拗音表記で読めるものは限られていた。WISC-IV の結果から本児は順唱のような単純な記憶再生に比べて聴覚情報を保持しながら操作を行った上で音声表出する複雑な記憶再生に困難があると推測された。指導は、まず混成規則の理解促進指導と、拗音かるたを用いた指導 (キーワード法による拗音表記と音価の対連合, 拗音単語からの拗音抽出を含む) を導入した。これにより拗音表記の正読数は増加したが、誤読が比較的多くみられた。続いて拗音の聴写指導を追加導入したところ誤読が著しく減少した。継続的にこれらの指導を行い、全拗音表記の読み書きを本児は習得した。

【指定討論の趣旨】

指定討論では、上記 3 つの話題提供をより大きな理論的枠組みの中に位置づける統合的な議論をいただく。また、特別支援教育の領域における、読み書きを含む学業スキルの困難に関する研究と実践に期待される今後の展開について議論をいただきたい。

(INOUE Tomohiro, MUROYA Naoko, IMANAKA Hirofumi, MAEKAWA Hisao)